海の道

三浦哲郎

文藝春秋刊

海の道
昭和四十五年二月一日　第一刷

定価　六百八十円

著者　三浦哲郎
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五―一二一一（代表）
郵便番号　一〇二

印刷　大日本印刷
製本　矢嶋製本
製函　加藤製函

万一乱丁落丁がありましたらおとりかえします

© 1970 TETSUO MIURA　Printed in Japan

海の道

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

その一　砲手ビョルンソン

明治四十四年の春、東北の三陸海岸の北はずれの矢ノ浦村に新設された東洋捕鯨会社の事業場に、ハンス・ビョルンソンというノルウェー人の砲手がきていた。捕鯨船の銛射ちである。

捕鯨会社の事業場というのは、沿岸捕鯨船の根拠地で、同時に獲ってきた鯨の解剖処理をする作業場も兼ねている。捕鯨船が曳いてきた鯨は、ここですぐさま解剖されて、必要な部分とそうでない部分とに分けられる。肉は船や荷馬車で港や市場に運ばれるが、脂身はここで塩漬にしたり、釜で煮立てて油を採ったりする。要らないものはボロ船に積んで、沖までいって捨ててくる。

矢ノ浦の事業場は、港の入口から五町ほど南へくだった岩浜の切れ目にある、浅い入江の浜に作られていた。凌風丸という百噸ばかりの捕鯨船がいて、これが三陸沖から北へかけての海から鯨を獲ってくる。この凌風丸の砲手をしていたのが、ハンス・ビョルンソンである。この船は、いまは凌風丸だが、もとはといえば東洋捕鯨会社がノルウェー本国から買い入れてきた鉄船で、彼はこの船が日本へくるとき一緒に雇われてきたのであった。

この砲手ビョルンソンが、事業場の入江を囲む丘の斜面が咲き揃った油菜の花で黄色く塗り潰されるころ、土地の女に、一と目惚れをした。

相手は、矢ノ浦の港の秋琴亭という料理屋で下働きをしていた、ぎんという女である。

ぎんは、矢ノ浦とは浜続きの鯵ケ浜という漁村の生まれで、二十四になる若後家である。十九の年にいちど近在の農家へ嫁にいったが、一年ほどで亭主に死なれて戻ってくると、おなじ浜から港へきて艀に乗っていた幼馴染の男

の口ききで、秋琴亭に住みこんでいた。嫁にいくとき、ぎんは牛の代りに貰われていくのだと、蔭口をいわれた。それほどの働き者でもあり、無器量でもあった。その上、軀つきもまた牝牛に似て、肩も胸も腰もがっしりと肉の張った大女である。取柄は、浜に育った下働きの女には珍しく色白なことだが、ただ色が白いだけで、のっそりとして、なんの愛嬌もない。

こんな女の、どこがビョルンソンの気に入ったのかわからないが、ぎんにしても、まさか自分が異人なんぞの目に留まることになろうとは、夢にも思わなかった。

ビョルンソンがぎんを初めてみたのは、油菜の花が咲くようになってからだが、ぎんの方ではその前に、二度彼をみたことがあった。いちどは、凌風丸が初めて矢ノ浦の港に入ったとき、もういちどは、彼が珍しく秋琴亭のお客になってきたときである。

彼が凌風丸で初めて港に着いたときは、まだ二月の末で、時折霙の降りかかる寒い日だった。船首に砲を据えた捕鯨船というものをまだ見たことのなかった港の人々は、凌風丸をどこかの国の軍艦だと勘違いして、すこし騒いだ。

ビョルンソンが波止場に降りてきたときは、あまりの大きさに、びっくりした。日露戦争帰りからロシヤ人の大きさは話に聞いていたが、異人とはこんなに大きなものかと、改めて呆れた。文字通り見上げるような大男である。顔は眼から下半分が、赤い鼻の先だけを残してほとんど鳶色の鬚に蔽われていた。それが波止場を歩いてくると、風に吹き乱される髪の毛がこっちへ向って逆立つようにみえ、女子供はおそれをなして家のなかに引っこんでしまった。

ビョルンソンは、まだ誰もみたことのない黒褐色のすべすべした薄手の毛皮外套を、前のボタンを外して無造作に着て、日本人の子供と一緒に歩いてきた。片方の肩には、ぴんと脹らんだ穀物袋のような袋を二つ、前と後に振分けにしてかけていたが、それがちっとも重そうにはみえなかった。足には、これもなんの皮だかわからない、鞣したような柔かそうな皮で出来た長靴を履いていた。霙でぬかるんだ田舎道を歩くには勿体ないような長靴にみえたが、彼は惜しげもなく足元から泥をはね散らしながら歩いてきた。

回漕問屋の軒下に屯していた見物人のなかに、日露戦争でロシヤ兵と組打ちしたことを一つ覚えの自慢話にしている重吉という男がいて、

「重吉っつぁん、一つ握手でもしてみせてけれ。」

と、みんなにせがまれ、綿入れ半纏の腕を組み直して霙のなかへ出ていったが、さっきまで、ビョルンソンと一緒

にくるのが子供だとばかり思っていたのが、自分とおなじ背恰好の若者なのに気がつくと、急に気おくれがしたように立ちどまってしまった。二人が目の前を通りかかると、彼はビョルンソンの方には手も出さずに、連れの若者を呼びとめて二言三言なにか話してから、小走りに軒下へ戻ってきた。

「ありゃあ、おめえ、ノルエ国のビルソンつう男だんね。鯨とりの銛射ちだっちゃ。」

と彼はいった。

「握手はどうした。」と訊かれると、「とても臭くて、近寄れねえ。」といったが、それがどんな匂いなのかはいわなかった。そんならロシヤの兵隊と、ノルエ国のビルソンとではどっちが大きいかと訊くと、それはどっちもどっちだと答えた。ロシヤ人をみれば、ロシヤ人が大きいと思うし、ノルエ国人をみればノルエ国人の方が大きいようにみえる。それは、満洲でみたときはロシヤの看護婦ほどでかい尻をした女はいないだろうと思っていたが、帰ってきてみると、秋琴亭のおぎんの方がよほどでかいという気がするのとおなじことだと、そんなこともいった。

ぎんは、そのとき、ちょうど風呂焚きをしていたが、女将のおむらが金切声を上げて呼ぶので、玄関へいって、女将や女中たちのうしろから硝子戸越しに、ビョルンソンたちが事業場の方へ前の道を通っていくのを見物した。

女中たちは、気味悪そうに眉をひそめてみていたが、ぎんはべつに気味悪いとも思わなかった。自分より大きな人間をみているのは、なんと安心なものだろう。ビョルンソンの毛皮で覆面したような顔をみて、あれを残らず剃り落すとしたらさぞかし難儀なことだろうと、ぎんはそんなことを考えていた。死んだ亭主も髭のこわい男で、胸の病で寝たきりになってからは、伸びた髭を剃ってやるのが一と苦労だった。それをふっと思い出したのである。ぎんは不断、死んだ亭主のことはすっかり忘れているが、たまに、思いがけないときにふっと思い出すことがある。大方つまらないことばかりだが、つまらないことなりに、よくもこんなことを覚えていたものだと、おかしくなったり、逆にどきりとしたりする。

ビョルンソンと若者のあとには、おなじ捕鯨船の乗組らしい十人あまりの日本人の男たち（彼等はそろって小粒に、その髭面はみすぼらしくみえた）が、思い思いの荷物を担いでぞろぞろと続き、最後に和三（わさ）という村一番の物好きが、ビョルンソンの歩き恰好を真似て、鬚がこんなだというふうに両手の十本の指を顎の下でもやもやと動かしてみせな

がら通っていった。この和三というのは、近くの町から士族の子弟たちが初めて自転車という乗物に跨がって港まで遠乗りをしてきたとき、道端からいきなりひょいと片足を出して、わざと轢かれて、「痛くない！」と見物衆に叫んでみせた男である。

「……とんでもない。あたいなんか、軀中の骨がこなごなに砕けっちまうえ。」

女中の一人が急に声をうわずらせてそういうと、みなは互に相手の胸を叩き合いながら大笑いした。その淫らな笑いざまをみただけで、みなのひそひそ話がいつのまにか卑猥なことに及んでいることが、すぐわかった。そうなれば、もう一緒にいても仕方がないから、引返そうとすると、年嵩の女中がぎんをちらと流し目にみて、

「まあ、どうやら太刀打ち出来る人といったら、うちのおぎんちゃんぐらいのもんじゃねえかし？」

といった。

なにをいわれたのか、すぐ見当がついたが、こんなときにはどういって挨拶すればいいのか、ぎんにはわからない。もうそんなことにいちいち顔を赤らめる齢ではないが、ついどぎまぎするのは言葉に詰ってしまうからで、逃げるが勝ちと、急いで風呂場へ引返してきた。

ビョルンソンが池田という事業場の重立った老人に連れられて、昼日なか、ひょっこり秋琴亭の客になりにきたのは、四月に入ってまもなくである。

そのとき、ぎんは飛石清水という、湧き水の流れに沿って両岸に石を敷きつめた村の共同洗濯場にいたが、通りで遊んでいた子供たちが駈けてきて、「いまお前の家に鯨会社のビルソンが入った。」といって知らせてくれた。

村の人々は、事業場のことを鯨会社といい、ビョルンソンのことはノルエ国のビルソンといっていた。鯨会社の方は誰からともなくそういうようになったが、ノルエ国のビルソンの方は、最初の日に戦争帰りの重吉が聞き違えたものが、そのまま広まったのである。

秋琴亭ではさぞかし狼狽しているのに違いない。そう思い、なにか手伝う仕事でも出来ているかもしれないと思って、洗濯を早目に済ませて帰ってみると、案の定、台所はビョルンソンの話で持ちきりだった。池田は藝者を呼べといったが、ビョルンソンのことがとっくに耳に入っていて、誰も居留守を使ってきてくれない。それで女将が仕方なしに、気付け薬の梅酒を飲んで座敷へ出ているということで

あった。耳を澄ますと、ぎんのような下働きの女にもあまり上手だとは思えない三味線の音がきこえていた。

けれども、ぎんにはべつに手伝うこともないようなので、裏の物干へ、盥に絞ってきた洗濯物をひろげにいった。その帰りに、なにげなく垣根越しに中庭の方をみると、座敷にいるものとばかり思っていたビョルンソンが、庭石に腰をおろして、瓢簞池の水面をぼんやり見下しているのが目に入った。

なにをみているのだろうと、ぎんはちょっと立ちどまった。瓢簞池には、鯉や金魚がいるわけではない。去年、雪融け水が流れこんで溢れたついでに、底を浚って、そのあとはただ水を張って置くだけである。水面に松の落葉が浮んでいる。

ああして座敷からきこえてくる三味線の音色に耳を傾けているのだろうかと、そう思った途端に、その三味線の音が途中で諦めたように、ぷつんと絶えてしまった。けれども、ビョルンソンは身じろぎもしない。

ちょっと西に傾いた陽ざしが、彼の広い背中に当っていた。彼は自分の影をみているような恰好で、相変らず池にぼんやり目を落している。それを横からみていると、石に腰をおろしているせいか、最初のときのように毛皮の外套を着ていないせいか、彼の軀がこの前より一と廻りちいさくなったような気が、ぎんにはした。それに、これは気のせいかもわからないが、なにかしら彼は意気銷沈して、しょんぼりしているようにもみえるのであった。

台所に戻ってみると、おむらもきていて、また気付け薬を舐めていた。下手な三味線を弾きはじめたら、途端に逃げ出されたので、すっかりつむじを曲げていた。手洗にでも立ったのかと思っていたら、いつのまにか庭に出て池なんか眺めている。

「辛気くせったら、ねえのし、全く。」

おむらは零した。

「酔い醒ましをしてんじゃねえのすか？」

と、ぎんが慰め顔にそういうと、

「あんなお化けが、ちょっとやそっとの酒で酔うもんかえな。」

と、おむらはいった。

けれども、ビョルンソンは酒はいくらも飲まなかった。そんなら料理を食べるかというと、そうでもない。蒸焼きにした骨つきの鶏を、ひとつ摘んだにすぎない。それも厭厭食うように、やけにゆっくり嚙んで、いつまでも骨をしゃぶっている。それがまるでぼんやり楊枝でも使っている

ようにみえた。
それかといって、賑やかに談笑するでもなく、唄を歌って騒ぐでもない。おむらは座を持ちかねて、母国ノルエの歌をひとつ聞かせてほしいと、池田の助けを借りながら所望したが、黙って首を横に振るばかりである。
「この人、どっか悪いんじゃねえのすか？」
おむらは困って、そっと池田に訊ねてみた。
「べつに軀はどこも異常がなさそうだがな、どうも生が悪くなって困ってるんじゃ。」
池田はそういって、ビョルンソンの方に気を使いながら、苦笑いを洩らした。
前にはむしろ陽気な男で、よくまわりの者がびっくりするような大きな声で笑ったものだが、一と月前からふっつり笑顔もみせなくなった。同時に、言動にも急に精彩を欠くようになった。なにか考え事をしている様子にみえることもあるし、ぼんやり放心しているようにみえることもある。事業場には、射った鯨の祟ではないかと怖気づく者もいるが、そんなことはあるはずがない。
「どうしたんでやんしょう。」
「それがどうしたんだか、さっぱりわからん。会社の待遇や仕事に不満があるのかと訊くと、そうではないといって首を横に振る。それではなにが気に入らないのかと訊ねると、やっぱり首を横に振る。なにしろお互に言葉が十分通じ合わないのだから、もどかしくて叶わん。」
これでは込み入った話はとても出来ない。大雑把なことを訊けば、大雑把な答が返ってくるだけである。尤も、向うがくわしい返事をしてくれたところで、こっちにはそれを十分理解してやれる自信があるわけではないのだから、向うも諦めてなにも話さないのかもしれない。
「んだば、よくいう塞ぎの虫ちゅうやつに取り憑かれたんでやんしょうか。」
「そうじゃな。ひょっとしたらホームシックってやつかもしらんな。」
池田はそういったが、おむらはホームシックなどという言葉は聞いたことがない。
「なんでやんす、その、ムシクイつうのは。」
「ムシクイ？　虫食いではなくて、ホームシックじゃよ。つまり、自分の里が恋しゅうてならぬという病気だな。里を遠くはなれて長旅をしている者が、よくかかる病気じゃよ。」
池田がにこりともしないでそんなことをいうので、おむらはくすくす笑い出した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「どうした。なにかおかしいことでもいったかな。」
「だって、こんな馬鹿でかい男が。」
と、おむらはいいかけて、あわてて掌で口に蓋をしたが、ビョルンソンの方は二人の様子には一向に無頓着で、窮屈そうに立てた膝を両手で抱くようにして、ぼんやり窓の外に眼を投げている。
そうか、なにをいっても馬の耳に念佛なんだと気がついて、
「こんな毛むくじゃらの大男が、どだい里が恋しゅうてならぬという柄でやんすか？」
「いくら図体が大きくて毛むくじゃらでも、人間には変りがないじゃろうが。それに、ノルウェーちゅう国がどんなに遠いとこか、お前さんには見当もつかんじゃろう。この海の遙か遙か向うには、亜米利加ちゅうどえらい大陸がある。その亜米利加の向うにはまたもう一つ大西洋ちゅう海があって、その海の向うの岸が、やっとノルウェー国じゃよ。」
池田がそういうので、おむらはびっくりして目をまるくした。
「そんなに遠くにも、国があるんでやんすか。」
「そら、あるわな。そんな遠い国から、言葉も通じない異国の片田舎に一人できて、くる日もくる日も鯨ばっかり追いかけとるんじゃ。いかな大男でも、ときには気が変になることもあろうじゃないかい。」
そういわれれば、ビョルンソンのような大男が塞ぎこんでいるのも、無理もないという気がしてくる。ともかく、たまには村歩きをするのも気晴しになるかもしれないと思って連れ出してきたのだと池田がいうので、それでは一つ景気よく騒いで塞ぎの虫を追い出しましょうと、おむらが三味線を弾き出した途端に、ビョルンソンがぷいと座敷を出ていってしまったのである。どこへいったのかと思っていると、庭でぼんやり池をみている。それでおむらは、くさって台所に引揚げてきた。
――結局、ビョルンソンの旅愁を慰めてやろうという池田の計らいも、ただ彼に窮屈な思いをさせただけで、無駄なことに終ったようだった。やがて二人は秋琴亭を出ると、背中に夕日を一杯に浴びながらぶらぶらと事業場の入江の方へ引返していった。
おむらや女中が、玄関に集ってきた近所の人々にビョルンソンのことを面白おかしく話して聞かせているころ、ぎんは裏の物置小屋の前で、さっきビョルンソンが切っていった庭下駄の緬緒を、新しいのにすげ替えていた。彼は

池田に呼ばれて引返すとき、履き馴れない下駄が辷って危うく転びそうになり、そのとき縄緒を切ってしまったのである。

その縄緒は、鼻緒と外側の横緒と、二カ所が引きちぎったように切れていた。彼が転びそうになったのは、いちどきりだというから、そのいちどに二カ所が切れたのだろう。なんと大した力だと、ぎんは切れた縄緒を下駄の台から抜き取りながら舌を巻いた。こんな馬鹿力の証拠をまざまざとみせつけられないことには、彼が捕鯨船の上で大砲を一人で動かしていると聞いても、なかなか納得出来るものではない。

それにしても、そんなに気が塞ぐほど里が恋しければ、大砲なんかいじるのはよして、さっさと帰ればいいのにと、ぎんはさっきのおむらの話を思い出しながら、彼のためにそう思った。しかし、そうはいっても、ひとりで海を二つも越えて出稼ぎにくるのは、いくら西洋の船乗でも容易なことではないように思われる。よほどの事情があったのに違いない。ひょっとすると、当分里へは帰りたくても帰れぬような事情があるのかもわからない。

すると、そのちぎれた縄緒には、彼の無念のようなものや、遺瀬なさのようなものが籠っているような気が、ぎんにはしてきた。そのまま放ったらかしにして置けば、やがて蛇のようにひとりでに動き出して、なにか悪さをしかけてきそうな気がする。薄気味が悪いので、ぎんはそれを指先で摘んで、飛石清水の川へ捨ててきた。

ところで、そのころ日本の捕鯨会社に雇われてきていたノルウェー人は、実はこのビョルンソン一人だけではなくて、ほかにもまだ大勢いたのである。彼等は全国各地の事業場に分散して、捕鯨船一隻に一人当て砲手として乗り組んでいた。

彼等のうちで最も早くからきていたのが、ピーターソンという老練の砲手で、これはもう明治三十二年に日本遠洋漁業という会社に雇われてきていた。日本遠洋漁業というのは、矢ノ浦にも事業場を設けた東洋捕鯨会社の前身で、日本で最初にノルウェー式捕鯨法を採用した会社である。

ノルウェー式捕鯨法というのは、汽船の船首に捕鯨砲を据えつけ、鯨を追いかけていって銛を射ちこむ方法である。銛の先端には爆薬が装塡してあって、これが命中して爆発すると同時に、銛のなかに詰めこんである四本の銛爪が鯨の体内で一斉に開いて、肉に深く食いこんでしまう仕掛け

になっている。銛の尻には綱がついていて、船と連結しているから、もう鯨は逃れられない。船は鯨を曳いて事業場へ引揚げてくる。

この方法は、日本流にいえば慶応のころ、ノルウェーのラッコ船の船長をしていた人が苦心惨憺の末に編み出したもので、当時としては実に劃期的な発明であった。これが明治も三十二年になって、ようやく日本でも実施される運びになったわけである。

それまでの日本ではどんな鯨の獲り方をしていたのかというと、網取法という遠く延宝年間に起った古い方法を用いていた。これは、網船と勢子船とが呼吸を合わせて、海岸近くに回游してきた鯨を殺す方法で、まず網船が追いこんだ鯨の前と後から網をかけ、何艘もの勢子船が一斉に殺到して、手に手に銛を打ちこむのである。

これで鯨が死んでくれればいいのだが、なかなかそうはいかない。これから先には一種儀式にも似た古来の手順があって、持双船という船を二艘繰出して鯨を両側から挾みつけ、それから合図で各勢子船から勢子が一斉に海中に飛びこんで鯨へ向って競泳し、一番先に鯨に手を触れた者だけが、選ばれて鯨の鼻に穴をあけて綱を通したり、つぎには背中に跨がって背鰭にも綱を通し、胴と腰にも巻きつけて、持双船に渡してある棒に鯨をしっかりと括りつけたりする仕事をする。それから、ようやく止めを刺す段取りになるが、このときは鯨は最後の力を振り絞って大暴れに暴れ狂うから、持双船の者は残らず他の船に避難しなければならない。

すったもんだの揚句に、やっと静かになった鯨を曳いて、木遣りなどを歌いながら浜へ引揚げる。勇壮だが、同時にまた悠長でもあり過ぎる捕鯨法である。海岸近くまで寄ってきた鯨しか獲物に出来ないこと、それに一頭を獲るために人数、時間、労力などがかかり過ぎることが、この方法の難点である。

この網取法は、文化から天保年間が最盛期で、明治に入るころになると、海岸近くに回游してくる鯨の数がめっきりすくなくなってきた。これは幕末のころ、鎖国中のわが国近海で、亜米利加、英吉利、露西亜の遠洋捕鯨船隊が手当り次第の濫獲をおこなった影響で、そのころ近海で操業していた外国捕鯨船の数は三百隻にも達していた。漁場はすっかり荒廃し、網取法は衰微する一方であった。

明治三十二年に設立された日本遠洋漁業という会社は、ノルウェー式捕鯨法を採用したというよりも、むしろノルウェー式の捕鯨をする目的で作られた初めての捕鯨会社で

ある。けれども、これまで網取法しか知らなかった者が、おいそれと西洋式に鞍替え出来るわけがない。鯨を追って船を操ることはともかくとして、捕鯨砲の操作となると、まるで要領がわからない。それで、指導員を兼ねた本場の熟練した砲手が是非とも必要で、まずピーターソンが雇われてきたのである。

当時、ピーターソンの待遇は、月給が二百円で、食糧は会社持ち、ほかに獲った鯨一頭につき大小に拘らず三十円の賞与が出るというものであった。これは当時としては破格の優遇で、一と月の収入は莫大な金額になる。このピーターソンを草分に、それから捕鯨会社が増えるに従ってノルウェー人の砲手たちが続々と日本へくるようになった。

ビョルンソンも、草分のピーターソンほどではなかったにしろ、相当な条件で雇われてきていた砲手たちの一人である。ただ、彼の場合は、運悪く新設されたばかりの辺鄙な北国の事業場に配属されたので、異人は彼一人だけで話相手もなく、いきなり唖と聾になったようなものであった。

ところが、異人というものはわからない。

あのとき、あんなに塞ぎこんで精気を欠いていたビョルンソンが、あれからまだ一と月もしないうちに、人が変ったように兇暴になり、殺気立って、船の乗組員や事業場の人夫等にしばしば乱暴な振舞に及ぶようになったという噂が、村の洗濯場で囁かれはじめた。

現に、ビョルンソンの拳で顎を割られた解剖夫が、村から馬車で町の医者へ運ばれていくのをみたという者も、何人かいた。その解剖夫は、解剖作業に熱中していて、艀で上陸してきたビョルンソンに気づかず、あやまって薙刀のような解剖刀の柄の尻で彼の太腿を突いたのである。あぶないといえばあぶなかったが、そんなあぶない作業場をのっそり通りかかった彼の方も不注意である。いずれにしても殴るほどのことはなかったが、ビョルンソンは眼をむいて、

「ファンノウソ！」

と大声で呶鳴ると、その解剖夫の手から解剖刀をもぎ取り、片手で首根っこを掴んで解剖盤の下に引きずりおろした。解剖夫は両手を合わせて拝んだが、聞いてくれない。腰を屈めて、

「ファンノウソ！　ファンノウソ！」

と解剖夫の顔に烈しく唾を吹きかけてから、子供の頭ほどもある拳で、ぐいと相手の顔を突き飛ばした。殴るというより、ただ突いただけのようにみえたが、解剖夫はもん

どり打って引っくり返った。
池田が事務室から、「ストップ。ストップ」と手を上げながら走り出てきたときは、すでに解剖夫がビョルンソンの前にあおのけざまに倒れていて、顔に鼻血が噴き出していた。
「ビルソン、ストップ。よろしいね？　ストップじゃよ。」
池田が遠くから暴れ馬を宥める身構えで、解剖夫を抱き起すと、彼は口からも血の唾を吐き出した。すると、その血のなかに折れた前歯が三本も雑っていて、貝殻のように砂の上を転がった。
ファンノウソというのは、ノルウェー語で「馬鹿」と罵る言葉だが、それが作業夫たちの耳にはハンノウソというふうにきこえた。半脳素という漢字を当て嵌めてみると、なるほど馬鹿だという意味にもとれる。作業夫たちは、みな半脳素恐怖症にかかっていて、解剖作業中に誰かがうっかり冗談に、「半脳素！」と叫んだりすると、思わず解剖刀を手から取落して盤から飛び降りる者もいた。
しかし、ビョルンソンがなぜ塞ぎの虫などに取り憑かれたのかわからなかったように、こんどの気違い虫をどこから背負ってきたのかも、おなじように誰にもわからないのだった。
ぎんが思いがけなく、ビョルンソンと顔を合わせることになったのは、そんな彼の半脳素が村まで伝わってきたころである。
五月の末の晴れた日の午後のことだが、ぎんは甚作という秋琴亭出入りの手伝人の老人と二人で、荷車を曳いて村の裏山の向う麓の部落まで薪を受取りにいった。往きは空車だから、上り下りの多い近道をとったが、薪の束を何十となくこぼれ落ちそうなまでに積み上げた帰り道は、山裾を迂回するゆるい下り坂の道をとることにした。
その山道は、村の南でふいに海に突当り、それから村まで海を右手に見下す崖道になる。三陸海岸というところは、浸蝕をうけた陸地がそのまま沈降して出来た海岸で、山地がすぐ海のきわまで迫っている。海に向って傾いた山裾がごつごつとした岩肌をむき出しにして、そこに波がしぶきを上げている。海岸線も、ちいさな半島や岬や入江が入り組んで、複雑な出入を示している。それで、大抵の道は海べりではなく、海や入江を見下す山地の中腹を通っている。
村の裏山の向う麓の部落から、山裾を迂回してきて、ふ

いに海に突当るというのは、ちょうど鯨会社のある奥行の浅い入江を見下すところなのであった。そこから村まで、右手に海を見下す崖道になる。ぎんは、その道を通るのはそのときが初めてではなかったが、鯨会社が出来てからは初めて通るのであった。

ぎんと甚作は、かわるがわる前で曳いたり後で押したりしながら坂を下ってきた。鯨会社の入江の崖道に出るときは、甚作が曳いてぎんが後を押していた。それまでの道は、山道とはいっても頭上に蔽いかぶさる木の茂みがあるわけでなく、油菜の咲きあふれる崖の斜面が両側にそそり立っている谷間の道で、空には初夏の陽が照り、乾いた道の空気は蒸れかえっていた。ぎんは、顔も軀も汗びっしょりだった。

崖道に出て、左へ折れる曲り角に、香取神社のちいさな社殿があり、その社殿と道の間を山から谷を伝ってきた細い流れが横切っていて、そこに鯨橋という名の土橋が架かっている。

そこまでくると、前を曳いていた甚作がたたらを踏むようにして、勢づいていた車を止めた。

「ぎんサよ。ここで一服つけていくべや。」

口のなかが、濃くなった唾で粘着いているような甚作の声が、荷の向うからきこえてきた。

「あいさ。そうすべ。」

ぎんは、頭から陽で熱くなった手拭を取って、それで顔の汗を拭きながら荷の蔭から前へ出ていった。そして、ふと入江を見下して、ぎくりと足をとめてしまった。「いやあ……。」というちいさな悲鳴がぎんの口から洩れ、それも途中で立ち消えてしまった。

これは、なんというまばゆい光景だろう。入江を半円形に囲んでいる山の斜面は、油菜の花で真っ黄色に塗り潰されていた。その下に、平べったい楕円形の、青く静まり返っている入江の海があった。けれども、入江の口にある事業場の建物の前の渚には、解剖盤に引揚げられた鯨が板片の上にあおのけに載せられた甲虫のようにみえ、鯨のまわりには人々が蟻のように群がって、ちかちかと陽のひかりを弾ね返す鋼の粉のようなものを撒き散らしながら、忙しそうに右往左往し、鯨の上に匍い上り、歩きまわり、辷り降りしていて、そこから、目も鮮かな紅の色が、群青の海に向って扇形に、刻々と押しひろがっているのであった。

「鯨会社だんね。」

甚作は煙管を吸いつけながら静かにいった。

「いま獲ってきた鯨を切ん撲ってるんだえさ。みれや、あ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com